アドミニストレーション　第 24 巻第 2 号　(2018)　ISSN 2187-378X

三浦 章（みうら あきら）教授への献辞

総合管理学部長　　黄　在南

三浦章先生は、2008 年 4 月に総合管理学部教授として着任され、以後 10 年間にわたり本学の発展に大きく貢献されました。2018 年 3 月 31 日付けで定年退職されるにあたり、先生のこれまでのご貢献に感謝するため、さらに先生のご退職を記念して記念号を捧げます。いま考えると、先生と本学との縁は偶然としか言えませんが、先生の本学でのご活躍を振り返ると、何か運命的なものを感じざるを得ません。

先生は 1978 年 4 月に日本電信電話公社（現 日本電信電話株式会社）に入社され、2008 年 3 月 31 日付けでドコモ・テクノロジ（株）を退職されるまでのほぼ 30 年間、日本を代表する NTT グループの中で主に研究開発業務に従事されてこられました。トップ企業での長年の経験から醸し出される安心感、理論と実践が兼備された揺るがない専門性、さらに先生特有の旺盛な探究心とパッションは、学部がスタートしてすでに 15 年が過ぎ、いよいよ見え隠れし出した安定と改革のテンションに耐えろうとする 2008 年の学部にとって、喉から手が出るほど欲しいものでした。

私達の期待がはずれることはありませんでした。さっそく着任 2 年目から入試委員長を、2010 年 4 月からは学部長を、2012 年 4 月からは学術情報メディアセンター長を、次々と歴任されながら、民間からの出身だからこそ見えてくる事務の効率化を基本コンセプトに各種事務プロセスの公式化と文書化に力を入れて頂きました。後輩たちを右往左往させるわけには行かないという先生の優しさにもすぐ気づきました。

必ず課題を解決してみせる、必ず結果を出してみせる、長年民間で培われてこられた先生の感性・思考・行動は学部教育にも見事に生かされます。とりわけ 2 年次の必修科目である「システム・アドミニストレーション」では、社会科学系学部の学生に対する情報教育の要諦は情報技術を応用した問題解決能力の涵養にあると早々と宣言し、社会とのつながりにおける学部の立ち位置を明確にされるなど、学部教育のこれからの方向性の確立に大きく貢献されました。その努力は、学部創設以来 20 年間、地域と共に成長してきた総合管理学部の「総合管理とはなんぞや」という私たちのレーゾンデートルのこれからのあり方にも影響し、平成 28 年度からスタートした新カリキュラムの構築に腐心してきた私達にとって大きな励ましとなりました。新カリキュラムの四つの柱の一つである基礎総合管理部門は、まさに先生の DNA の所産であります。

研究面では、高品質なネットワークソフトウェアを設計・製造する方法論、移動パケット通信における交換機性能の評価、等の研究開発業務を通して得られた知見を学術的に体系化され、工学博士号を取得されました。本学に入られてからは、論理的判断能力や問題解決能力の向上とい

った、総合管理学部生に対する教育的効果を強く意図した研究課題に一貫して取り組まれ、講義を通して学部生にも教授されました。多数決による意思決定の数学モデル化および解析的評価、数量的スキルに基づく問題設定・発想法の体系化、問題解決フレームワークの体系化および社会的課題（地域創生）への適用、等の成果は、学部生が社会に羽ばたいた後も周囲に流されずに自立した市民としてより良く生きるための拠り所となることでしょう。

大学運営は、まさに先生の真面目さがうかがえるところでした。本学部に入職されてからまもなく入試委員長の職に就任し、そのあと引続き学部長と学術情報メディアセンター長の要職に就任されます。慣れない大学の仕事に民間でのご経験が通用する保証はなく、大学特有の意思決定の曖昧さに耐えられるかを危惧する人もいましたが、その期待は見事に裏切られました。先生の持ち味である徹底したマニュアル化によるミスの防止と厳格な日程管理は、学部にとってはかつて経験したことがなかった、程ほどが通用しない結果重視の真の経営マインドの登場でした。それこそこれまで総合管理が追求してきたものの一つであり、これからも忘れてはならない学部運営のアキレス腱になっていくに違いありません。

社会貢献に対する先生の関心はとくに高く、大学内外において時間を惜しまず全力で取り組んで頂きました。自治体職員やまちづくり関係者向けの熊本県立大学 CPD プログラム、自治体職員など向けの自治体現場における課題解決の技法を学ぶ講座、一般県民向けのくまもと県民カレッジリレー講座や数学が面白くなる講座などなど、高い専門性に裏付けられている知識を翌日の講演のために夜を徹して噛み砕こうとする先生の姿から、地域に根付いた大学としての使命を一刻も忘れてはならないという無言の教えをおぼえるのは自分だけではないはずです。

振り返るとあっという間の 10 年間でしたが、10 年の期間は単なる時間の経過に過ぎず、10 年の期間の中にとても納めきれない先生と学部の濃すぎる縁にはやはり運命的なものがあったと自分達に言い聞かせたくなります。私達はこれからも教育、研究、大学運営、地域貢献の現場で頭を抱えながら試行錯誤する日々を数多く送ることになりますが、先生との出会いが残してくれました数々の教訓を日々思い出しながら前に進んで行きます。

定年退職を残り 1 年にして、先生は網膜剥離という重い眼の病気に見舞われました。失明するかも知れないという一連の不安感の中で重苦しい空気に満ちている病室を思い描いて、見舞に伺いました。先生のご対応にほっとしました。「この年齢まで、以外は大きな問題もなく過ごせていますので、健康な体に生んでくれた両親に感謝です」と。

帰りに、これまでの先生との数々の出来事を振り返ながら少し考えました。つねに自然体で見せてくださる先生の感謝の気持ちや勤勉さこそ、私たちの出会いを素晴らしいものにして下さったと。三浦先生、長い間、本当にお世話になりました。